

新疆ウイグル自治区における

オアシス・ツーリズムを通じた社会の持続性に関する研究

— 企業型農家楽と家族型農家楽の事例を中心とした比較分析 —

リシャラテ・アビリム

本研究では、新疆ウイグル自治区の少数民族の文化を観光資源として活用し、民族文化を保護し、維持を図りながらウイグル民族が居住する地域の経済的発展を両立させるため、民族文化観光のあり方を検討した。

研究方法として、現在までに公開されている文献を活用し基礎的な先行研究を行った。次に、農村で展開されている農村観光の主体である農家楽（農家民泊）について現地調査を実施し、観察、聞き取り調査、資料の収集を行った。

現地調査は、新疆ウイグル自治区の東部、北部、南部のトルファン、ハミ、ウルムチ、イリ、カシュガル、ホータンの6つの地域で農村観光の実態についてフィールド調査を実施した。実態調査を行った結果、少数民族地域の貧困や少数民族文化が変容しつつある実態を把握することができた。

本研究で現地調査を行った結果、農村観光の現状の形態を「企業型農家楽」と「家族型農家楽」に大きく分類することができた。農家楽の発展に関して具体的な課題を抽出し、解決策としてオアシス地域住民が考える持続可能な社会の実現に対応できる方策として「オアシス・ツーリズム」という新たな観光概念のあり方を提案した。

この取り組みにより、新疆ウイグル自治区のウイグル社会、農村の各地域が経済的に活性化され、ウイグル文化の保護、維持に繋がり、それらを実現に対応できる観光のあり方として、新たな概念である「オアシス・ツーリズム」による「家族型農家楽」の観光形態が持続可能であることを検討した。

本論文は全8章からなる。

第1章の「新疆ウイグル自治区の概況」では、新疆ウイグル自治区の地理的な位置、気候、民族構成、人口などを紹介した。次に、少数民族が住む乾燥・砂漠地帯の特色あるオアシス地域の農業について述べた。続いて、ウイグル文化の保護、維持の有利性を分析し、それらを地域の観光資源として活用することで、現代ウイグル文化の保全、維持に繋がり、その地域住民の生活への経済効果を検討した。

第2章の「中国の農家楽と新疆のオアシス・ツーリズム」は、中国各地からの観光客に注目されている農村観光の農家楽の意味、その分類、経営のあり方について論じ

た。最後に、本研究で提言する「オアシス・ツーリズム」の特徴について述べた。

第 3 章の「オアシス・ツーリズムを通じた社会の持続性」では、ウイグル社会の観光の持続性について地域住民の見方から明らかにした。地域住民が望む社会を持続可能にする「オアシス・ツーリズム」により、オアシス農村社会の持続可能性を検討した。

さらに、ウイグル農村で農家楽の経営の実態調査を行い、その結果に基づいて、第 4 章「新疆ウイグル自治区の東部における農家楽の現状と課題」、第 5 章「新疆ウイグル自治区の北部における農家楽の現状と課題」、第 6 章「新疆ウイグル自治区の南部における農家楽の現状と課題」をまとめた。

基本的に、東部、北部、南部における農村の農家楽の経営の現状を明らかにしたうえで、課題とその改善策を検討し、観光客の評価を分析した。

第 7 章の「企業型農家楽と家族型農家楽の持続性に関する比較分析」では、調査した農家楽の事例を「企業型農家楽」と「家族型農家楽」に分類し、それらの農家楽が抱えている課題を検討した。それに加えて、それぞれから成功事例と失敗事例を取り上げ、現在の新疆ウイグル自治区で急速に増加している企業型農家楽と家族型農家楽を分析し、農家楽の持続可能性を検討した。

第 8 章の「本論文の結論と今後の課題」では、民族文化を観光資源として活用し、オアシス地帯で農業を生業とする農家が経営する農家楽の形態は、「家族型農家楽」のほうが持続の可能性があることを結論づけた。

今後、新疆ウイグル自治区において、オアシス・ツーリズムによる少数民族地域の経済発展と地域文化の保護、保持が両立し、持続可能な社会が形成されることを期待し、本論文の結びとした。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 98号	氏 名	リシャラテ アビリム
論文題目	新疆ウイグル自治区におけるオアシス・ツーリズムを通じた社会の持続性に関する研究		
(論文審査概要)			
<p>リシャラテ アビリム氏の学位申請論文「新疆ウイグル自治区におけるオアシス・ツーリズムを通じた社会の持続性に関する研究」は以下の8章で構成されている。</p>			
<p>第1章 新疆ウイグル自治区の概況 第2章 中国の農家楽と新疆のオアシス・ツーリズム 第3章 オアシス・ツーリズムを通じた社会の持続性 第4章 新疆ウイグル自治区の東部における農家楽の現状と課題 第5章 新疆ウイグル自治区の北部における農家楽の現状と課題 第6章 新疆ウイグル自治区の南部における農家楽の現状と課題 第7章 企業型農家楽と家族型農家楽の持続性に関する比較分析 第8章 結論</p>			
<p>第1章の「新疆ウイグル自治区の概況」では、新疆ウイグル自治区の地理的な位置、気候、地形、行政地域、民族構成、人口などを紹介した。続いて、乾燥、砂漠地帯の特色的な資源であるオアシス農業地域の特徴を明らかにした。ウイグル民族文化の保護、維持の有利性を分析し、それらを観光資源として利用することで、ウイグル民族文化の保全、維持に繋がり、地域住民の生活への経済効果があることを検討した。</p>			
<p>第2章の「中国の農家楽と新疆のオアシス・ツーリズム」では、中国の農家楽の意味と農家楽の分類、発展状況を明らかにしたうえで、発展過程における課題を検討した。その後、農家楽の特性、経営のあり方に注目し、本研究で提言する「オアシス・ツーリズム」の特徴について述べた。</p>			
<p>第3章の「オアシス・ツーリズムを通じた社会の持続性」では、ウイグル社会とウイグルにおける観光の持続性の関係を地域住民の見方から明らかにした。つぎに、地域住民が望む社会を持続可能にする「オアシス・ツーリズム」の視点から、持続的可能な農村社会について検討した。</p>			
<p>第4章「新疆ウイグル自治区の東部における農家楽の現状と課題」、第5章「新疆ウイグル自治区の北部における農家楽の現状と課題」、及び第6章「新疆ウイグル自治区の南部における農家楽の現状と課題」では、自治区の東部、北部、南部地域で、農村観光の現状について調査活動を実施し、そこで農家楽の事例を取り上げ、農家楽の経営現状と直面している課題を明らかにした。また、農家楽の経営に対して観光客の評価を分析した。その後、第4章、第5章、第6章の内容をまとめて検討し、東部、北部、南部の農家楽調査</p>			

で明らかになった結果を第6章の第5節にてまとめた。

第7章の「企業型農家楽と家族型農家楽の持続性に関する比較分析」では、調査した事例農家楽を、「企業型農家楽」と「家族型農家楽」に分類し、それらが抱えている課題を検討した。それに加えて、それぞれから成功事例と失敗事例を取り上げ、現在の新疆ウイグル自治区で急速に増加している企業型農家楽と家族型農家楽を分析した結果に基づいて、農家楽の持続可能性を探った。この章では、都市郊外の「家族型農家楽」におけるウイグル民族文化の活用現状について、実態調査を行い、それぞれの農家楽の成立や仕組み、地域の外観、農家楽の展開、農家楽の景観分析事例、農家楽に対する観光客の評価について分析した。

第8章の「結論」では、論文の全体をまとめた。これまでの研究調査した結果から、少数民族伝統文化を観光資源とし、オアシス地帯で農業を生業とする農民が経営する農家楽経営は、「家族型農家楽」が持続の可能性のあることを結論づけた。

なお、論文審査委員による本論文に対する評価は以下のとおりである。

1. 創造性

アンケート調査が困難な遠隔地において、現地の言語を運用した複数のインタビュー調査を組み合わせることで、比較的普遍性が高い、独自の証明方法を編み出している。新疆ウイグル自治区における農家楽に関する小規模な調査はいくつか見られるが、ウイグル民族の農村文化を活用したオアシス・ツーリズムに研究テーマを特化したことは、創造性の点で優れている。

2. 論理性

先行研究のレビューの一環として、新疆ウイグル自治区以外の農家楽や日本のグリーンツーリズムについても幅広く調べている。先行研究から得られた広い視野から、独りよがりではない観点で、新疆ウイグル自治区のオアシス・ツーリズムの独自性を導き出していることは、論理性の点で達成できている。

3. 厳格性

「2」で挙げたように十分に先行研究をレビューしており、なおかつ先行研究の問題点も的確に指摘し、学位論文の執筆に反映している。「1」で述べた方法で調査の普遍性を高めたことにより、厳格性の点も達成されている。

4. 発展性(選択的記述項目)

外部の資本である企業型農家楽と現地住民による小規模な農家楽について比較研究を行い、ウイグル文化の真正性を持続的に維持するためには後者が優れているとの結論であるが、持続可能性の判断には長い年月がかかる。本論文の審査対象外ではあるが、今後数十年単位で継続して研究を行ってほしい。

--

論文審査結果

○合・否

審査委員 主 査 (氏名) 植村高久

(氏名) 浜島 清史

(氏名) 野村 淳一

(氏名) 塚田 宏人

(氏名) 朝水 宗彦